

言語変異の社会的意味と言語イデオロギー

太 田 一 郎

【キーワード】 言語変異, 社会言語学的風景, 変異の社会的意味, 言語イデオロギー, 言語変種形成

【要旨】

言語変異の社会的意味を, 社会変数として利用される既定の社会カテゴリーの反映ではなく, アイデンティティの構築と言語イデオロギーという点からとらえ直すことを試みた。

1. はじめに—相関主義の問題—

1960～70年代におもに欧米で行われた都市方言を対象にした言語変異の研究では、日常言語に観察される変異が、sex, age, social class, ethnicity, style などの社会的要因と相互に作用しあっていることがあきらかになり、社会的要因と言語変異の間の相関関係に着目することで進行中の言語変化を観察することが可能となった。Labov や Trudgill らの研究によりあきらかになった言語変異の規則性は、ある speech community 内での変異の使用に一定のパターンが見られるという事実によって確認できるが、その規則性を見出す基準は社会変数との相関によっている。たとえば、Labov (1972) においては、言語変数の使用が social class によって層状化していることが示された。このように、言語にあたえる外部要因の影響を相関という形でとらえる姿勢を「相関主義」と呼ぶのであれば、変異理論のアプローチはまさに相関主義である。¹⁾

Labov 派の言語変異研究からは、ことばと社会の間に見られる相関を利用してすぐれた知見が得られた一方で、相関関係の存在が理論上重要な意味をもつため、変異理論は「相関関係だけでモノを言う」という誤った形で理解

* 本稿は、平成13-15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「日本語諸方言に見られる中間言語的変異研究—言語変異理論の立場から—」(研究代表者: 太田一郎 課題番号13410193) による研究成果の一部として報告書に掲載したものに、加筆・訂正を加えたものである。

されていることも少なくない。²⁾ Weinrich, Labov, and Herzog (1968) に述べられるように、もともと言語変異研究のおもな目的は、進行中の言語変化をとらえ、そのメカニズムをあきらかにすることであり、ことばと社会的要因の相関を求めるのは、変化が社会の中のどこからどのように広がり、どう埋め込まれていくのかをさぐるためである。そのためには、ことばを変化させる話者が社会のどこに位置し、どのような行動をとるのかをとらえる必要がある。つまり、相関を求めるのは方策なのであり、そのことが最終の目的ではないのである。

しかしその一方で、その相関の求め方に問題がないわけではない。相関は通常独立変数である社会変数と従属変数である言語変数との間に求められるわけだが、じつはその社会変数のとらえ方そのものに問題がある。たとえば、生物学的性 (sex) にもとづく話者分類では、「女性の方が標準形を (多く) 用いる」というように結果が提示されることが多い。その理由には女性の社会的地位の不安定さなどがあげられてきたが、このような考えについては「ことばとジェンダー」の研究者たちからはきびしく批判されている。変数や社会的威信などの説明要因がかかえる問題が十分に検討されないままことばと社会の相関を求めることは、きわめて危険であると言わざるをえない。言語変異はそもそも何を表すのかということを明確にすることなしに、むやみやたらと変異の分布に相関を見つけても何の意味もないことはあきらかである。

そこで本稿では、現行の社会言語学、言語変異理論の研究成果をもとに、言語変異と社会変数の関係を分析することにどういう意味があるのかという問題を、社会内における言語変異の意味とその意味を生み出す原理という2つの点からとらえなおし、今後の変異理論研究の可能性について考えてみたい。

2. 言語変異の重要性—変異の社会的意味—

2.1 変異の意味を求める

Weinrich et al. (1968) は、年齢、性別、階層、スタイルなどの社会的要因による差異、すなわち「秩序ある分化 (orderly differentiation)」を示すこ

とで言語が社会の要求を満たすことを指摘した。特定の変異形の使用状況からは、階層、年齢などの話者属性がある程度推定できる。つまり、日常の言語使用において、言語変異は話者情報を伝える機能をもつ。また、発話場面のフォーマリティはスピーチスタイルに反映され、変異形の使用頻度にことなりが見られる。われわれはこのような変異形の使用から通常何らかの情報を得ており、これらはしばしば言語変異の「社会的意味 (social meaning)」(Eckert 2000), 「社会的重要性 (social significance)」(Chambers 2003) などとよばれる。

Weinrich et al. (1968) 以降, おもな変異理論研究においては, 言語変化を方向付ける社会的要因を取り込んだ理論の枠組みが考案されてきたが, 何が言語変化を促進する要因になるかを考えるとき, 変異にどのような社会的意味が付与されるのか, およびどのようにしてその意味をもつようになるのかはきわめて重要である。なぜなら変化は今この場で起きており, 今この場で言語変異の社会的意味がとらえられれば, それが言語変化にあたえる影響が考察可能になるからである。

言語変異がどのような社会的意味をもつかは, 社会的意味とはそもそも何か, どのような過程をへて構成されるものなのか, 具体的にはどのような形であらわれるのか, どのようにして社会による意味の付与は行われるのか, さらにはその社会的意味が言語構造にどのような影響をあたえるのかなどが, 調査対象の集団が存在する社会・文化的文脈も含めて検討することによってあきらかにされねばならない。

本節では, 変異の社会的意味の定義とそれが構成されるメカニズムを言語の標示機能の点から, そしてその標示機能によりあらわされる社会的意味とその具体的な形について, 中村 (2001), Eckert (2000)を参考に論じてみたい。

2.2 社会的意味の標示

中村 (2001:103-4) は、言語形式があらわす社会的意味は、内容を「指示する (referring)」機能ではなく、「標示 (indexing) する」機能により表示されるものだと言い、その意味として次のようなものをあげる。

- (1) a 言語で伝えられる内容に対する話者の気分、感情や認識などの心的態度
- b 社会的地位や年齢などの話者の属性

後者はこれまで変異理論で社会変数として取り扱われてきたものである。前者の方は、むしろ語用論で取りあつかわれる意味に近い。シルヴァーステイン (2002: 76) では、語用論の研究対象には、目的、話者の意図にかかわる「合目的機能」と、「或る特定の言語形態の一時的な偶然の生起あるいはその言語形態の体系的な指標的価値」を表す「指標的機能」があることが述べられている。(1) a の心的態度、(1) b の話者に関する社会的情報はともに、言語形式によって「指示」されるのではなく「標示」されるので、社会的意味は言語使用の指標的機能によるものと考えられる。

では、「指標的機能による標示」とはということなのだろうか。まず、「標示する」とは、中村 (2001: 104-5) によれば、「無限にあるコンテクスト的要因のうち何を解釈に関与させるか」を示すことであるという。つまり、「指標 (indexicals)」と呼ばれる言語形式は、ディスコース実践 (= 言語を用いる行為) の解釈において、さまざまなコンテクスト要因のうちどれに関与させるかを示すのである。たとえば、「今日は暑いーわ/ぜ」の文末助詞「わ」や「ぜ」のように、「非指示的指標」と呼ばれる言語形式は、「柔らかさ」、「荒々しさ」とでも言えるような言語形式により直接的に標示される社会的意味を伝える。そしてその社会的意味は、「男の話し手」、「女の話し手」のような意味を間接的に構成するが、この間接的な意味は社会的・文化的慣習により、「柔らかさ」、「荒々しさ」が性別と関連づけられている (という知識を持つ)

ことにより、ジェンダーなどの社会カテゴリーや特定のアイデンティティと結びつけられることができる（中村2001: 105-6）。

社会的意味の構成がこのような過程をへると考えるならば、(1) b の話者の属性は、これまでの変異理論で社会変数として取りあげられてきたものとは、じつはかなり異なることがわかる。ジェンダー、階層などの社会カテゴリーは、言語形式が直接標示する社会的意味ではなく、「社会的意味を媒介にして間接的に構成される特徴」なのである（中村2001: 106）。たとえば、上述の「男の話し手」、「女の話し手」は、社会において「柔らかさ」、「荒々しさ」が性別と関連づけられていなければならない。すなわち、「男の話し手」、「女の話し手」は社会的意味を媒介にして間接的に構成された意味であるといえる。

2.3 社会的意味の生成の場とその具体的姿

上述のように、言語的には社会的意味は、言語形式の指標的標示機能によるものとみなすことができる。この意味はつぎのような社会的過程をへて作られていくものと考えられる。Eckert (2000) によれば、言語変異の社会的意味は、話者がコミュニティ・オブ・プラクティス（実践の集団、以下 CofP）において、社会的実践を行う過程の中で作りあげられる。Meyerhoff (2002) によれば、CofP においては、そのメンバーは相互に関わり合い（mutual engagement）、共同で交渉・協力しながらある活動を行い（share some jointly negotiated enterprise）、そして交渉を行う中で共有のレパトリー（＝資源）をもつようになる。このような集団における社会的実践をとおして、言語形式の社会的意味（たとえば「柔らかい」、「荒々しい」など）が作られる。そして、社会的意味は結果として話者のアイデンティティを構築することになる。このアイデンティティには話者にかんする情報が反映されるので、話者情報にもとづいて社会変数を決めれば、その統計的結果には当然相関関係が見られるはずである。こう考えると、社会言語学的変異の研究は、変異とアイデンティティの関係を探ることだと言える。

Eckert (2000) によれば、変異の社会的意味へ接近するということは、CofP での社会的実践において、彼らが「ことばのスタイル」と結びつける何らかの意味を理解することと同義である。彼女は、変異から連想される社会的意味は、具体的な場所、人々、問題となっている事柄、およびスタイルに関係があり、日常の身近な世間・社会において構築されるローカルなものであることを強調する。この「スタイル」は、Labov の「ことばへの注意 (attention-paid to speech)」や Bell の「オーディエンス・デザイン」のように、コンテキスト要因への「反応 (reaction)」としてとらえられるのではなく、社会的実践をとおして自らのアイデンティティ構築のため言語 (変異) が記号論的資源 (resource) として利用された結果のプロダクトである。その意味では、社会的意味の具体的な姿はスタイルに見ることができるのである。そのため、Eckert (2004) は社会的意味を探るためには、個別の言語変数ではなく、スタイルを出発点として研究を行うべきだと主張する。

2.4 ローカルからグローバルへ：社会言語学的風景

Eckert は、アイデンティティとその表出形としてのスタイルの構築が CofP というローカルな集団においてなされることを示した。アイデンティティの構成は、ある個人が複数のアイデンティティをもつとしても、基本的に CofP 単位で行われると考えてよいが、個々の CofP は近隣の地域社会や学校、職場などの集団の中に存在するので、アイデンティティの構築はその CofP がふくまれる上位集団からの影響を強く受けるはずである。この上位の社会集団は、複数の CofP がかさなり合いながら構成しており、その集団に見られる言語特徴の分布や言語行動にかんする全体像は、「社会言語学的風景 (sociolinguistic landscape)」と呼ばれる。この社会言語学的風景においては、話者集団の社会カテゴリーは、階層、ジェンダー、社会ネットワーク、言語市場などの全体的 (グローバル) な抽象概念でとらえられる社会的に目立つ (salient) 部分と重なる。これらの概念は、変異理論では社会変数として設定されるおなじみのものだが、その定義は必ずしも既定のものではなく、

CofP における変異の社会的意味と相互に影響をあたえあう。その意味では、ローカルな場で形成される社会的意味は、グローバルな社会カテゴリーを参照にしながら、社会カテゴリーそのものの社会的意味も変化させていくのである。

このように考えると、ローカルな CofP で作られる変異の社会的意味は、グローバルな社会カテゴリーとの相互作用であることはわかる。しかし、たとえば文末助詞の交替が「男／女の話者」という意味を伝えるのならば、変異の意味は社会集団がもつ何らかの指向性とかかわりがあるはずである。そしてそれは、その社会、集団の歴史的・文化的経緯とふかく関係し、その中で作り上げられ集団全体に共有されてきた意見・思想の傾向だと思われる。

3. 言語イデオロギーと言語変化

3.1 指標性理解のシステムとしての言語イデオロギー

社会的意味の構築は、言語のもつ指標的標示機能とローカルな CofP という場における社会的実践によるが、実践を通して個人、集団のアイデンティティが形成される過程では、その途中で参照される言語にかんする社会通念が必要になる。この社会内で通用する信念は「言語イデオロギー (language ideology)」と呼ばれる。Silverstein (1979:193) は、これを「使用者が言語の構造とその使用についての合理的な理由づけとして、または正当化・弁明として述べる、言語に対する信念」と定義する (Milroy 2003:161より引用)。また、このイデオロギーが対象とするのは、言語を使用する際に話者たちが「言語行為に持ち込む言語形態、意味、機能、価値」など言語全般におよぶ (シルヴァーステイン2002:76)。Milroy (2003) は、このイデオロギーは社会的に目立つ集団の特徴と見なされる変種・言語形式への反応、態度・意識としてあらわれるが、この集団は必ずしも階層やジェンダーなどの社会カテゴリーである必要はないと言う。つまり、話者が集団の社会言語学的構造 (= 社会言語学的風景) をどのように理解しているかの具現化とみなされるべきものと考えられる。

